

男女共同参画ランチョンワークショップ

「優れた科学の芽を皆でサポートするために」 ～子育てと研究の両立をめざして～

日 時：9月4日（木）12：00～13：00

会 場：C会場（IB013）

世話人：日本遺伝学会男女共同参画推進特別委員会
名古屋大学男女共同参画室

（科学技術振興調整費「発展型女性研究者支援名大モデル」事業）

日本の理工系分野における女性研究者の割合は、平成19年で12.4%であり、先進国の中でも大きく遅れをとっている。出産や育児の時期に研究をどのように両立させるか、この間の研究活動の低下をどのように取り戻すかなど、多くの問題に対する取組は始まったばかりである。本ワークショップでは、まず、Prof. Armitage (Univ. of Oxford) より、イギリスの女性科学者の実情について、雇用に関する統計も含めたお話をしていただく。続いて、子育てと研究の両立について3人の若手研究者からの話題提供のあと、Prof. Armitage, 品川日出夫日本遺伝学会会長、森郁恵日本遺伝学会第80回大会委員長を交えて、さまざまな立場から男女共同参画の現状を見つめ、研究者自身がなすべきこと、社会で取組むこと、さらにはこれから研究者を目指す人々へのアドバイスを含め、共同参画のあり方について議論する。（総合司会：日本遺伝学会男女共同参画推進担当特別幹事 松浦悦子）

1. はじめに 品川日出夫（日本遺伝学会会長）

2. 特別講演 「イギリスの女性科学者について」

Judith Armitage (University of Oxford)

3. パネルディスカッション

（司会：日本遺伝学会男女共同参画推進特別委員会委員 大坪久子）

★「家族と同居しながら仕事を続けるために」

楠見淳子（JT生命誌研究館）

男性、女性に限らず若手研究者が常に就職の不安を抱えている現状では、事実上、勤務地を選ぶことはほぼ不可能に近い。また、ほとんどが期限付きの雇用であるため、数年おきの異動を余儀なくされることになる。複数の研究室を経験することは、研究者にとって有意義な面も多いが、共働きの場合、家族別居を強いられる。首都圏では、夫婦そろって近隣の大学や研究機関に新しい就職先を見つられるかもしれないが、地方都市ではそのような機会は皆無といって良い。現在、私達家族も滋賀と福岡に別れて生活しており、数年後には同居することを望んでいるが、今のところ具体的な対策がたてられずにいる。例えば、配偶者と同居を望む研究者に、一定期間、同一地域の研究機関でのポストが確保できるような制度作りはできないのだろうか。

★「女もすなる育児というものを男もしてみんとて…」

手島康介（総合研究大学院大学）

男女共同参画を実現するために、重要なポイントは3つある。一つは不安を取り除くこと。結婚、出産、育児が自分の研究者としての可能性を制限し、将来を閉ざしてしまうという不安は強い。この感情を取り除くための体制、前例作りが必要である。第二に研究と家庭の両立は容易ではないが有意義であるという理解を広めること。研究と家庭を両立させるイメージを持っていない人は多い。両立の価値とその為のコストを理解することは、当人だけでなく周囲の人間に対しても意味がある。最後に、研究環境に大幅な自由度を認め、復帰の機会を最大限増やす努力を行ったうえで、あくまでも一研究者として評価されるべきである。出産育児を理由に冷遇されることが妥当でないのと同様、過度な優遇措置は翻って男女の役割分担を迫認することになるため、注意が必要である。

★「It takes a village to raise a child!」

佐々木成江（名古屋大学男女共同参画室）

研究職は、高度に専門化された職種の一つである。また、子供にとって母親は特別な存在である。研究と子育ての両立とは、まさにこれら二つの代替が難しい状況に立たされることを意味する。ここで仕事を断念することは自分のキャリアを失うことであり、大学にとっては貴重な戦力を失うことになる。両者にとってベストな状況は、お互いにワークライフバランスを整える工夫をし、業績を持続的に向上させることである。子供ができたときに考え始めるのでは遅い。なぜなら、子育てと研究で時間に追われ、解決策を考えるゆとりがない。家庭でも研究でも、時間密度を上げるために、仕事の効率化、サポート環境、優先順位など、研究を進めるような感覚で、両者でじっくり知恵を出し合っておくことが解決の糸口であるように思う。

4. おわりに 東村博子（名古屋大学男女共同参画室長）